



酒入郁子・佐藤由紀子 ほか
バベル・プレス 2,525円+税
1991年

日本語を教える④
外国人が日本語教師によくする100の質問

執筆者たちは、長年にわたって日本語教育に携わってきた。その中でぶつけられた日本語に関する疑問を「音声」「文法」「語彙」「文字・表記」等に分類して示し、解説を添える。

例えば、「**「ヲとオは違う文字ですが、音も異なりませんか？」**」「鉛筆があります。鉛筆ハあります。どう違いますか?」「帰った方がいいです。帰る方がいいです。どう違いますか?」「日本語ではアナタはどのくらいの範囲にまで使えますのですか?」……このような魅力的な疑問が百個並んでいる。

まず、その問題の発見が見事である。実際に外国人(日本語学習者)がぶつけた疑問かどうかは不明だが、個々の疑問は、丹念にほどいていくと日本語の特色につながる問題ばかりである。

さらに、例文を伴った具体的な解説が見事だ。解説を読む前に自分なりに解説を考え、執筆者たちのそれと比べると、その適切さが実感される。

そして三つめに、授業の示唆が与えられる。文法の学習が文法用語の暗記になりがちだったり、文法嫌いな子どもたちが多いことなど、指摘されることが多い。それらを打開する一つのヒントが疑問の中に隠れている。示されている疑問にちよっとした工夫や加工を施すことで、授業の中枢に据えて生徒の課題意識を喚起することができる。

興味深い内容であるので、単に読み物として楽しむこともできる。しかしそれだけではもったいない。生きた国語の学習につなげていける本でもあるというのが、正直な読後感である。

(紅林定宏)



品田悦一 著
新曜社 3,200円+税 2001年

万葉集の発明
国民国家と文化装置としての古典

目から鱗の落ちる本、というものがある。今まで知っていた、あるいは知っていたつもりのも物が、まったく新たな姿で見え始めてくるような本のことだ。間違いなく本書はそういう類いのものである。

私たちは、こう思っている。「万葉集」は、天皇から庶民まで、古代日本のあらゆる階層の人々の歌を載せた歌集である、それらの歌は、古代人の素朴な心を率直に表している、だからこそ「万葉集」は、日本人の「心のふるさと」であり、日本の「国民歌集」なのだ——と。これは、多くの教科書・文学史にも掲載されている、日本人の常識といってよい。

その常識は間違っている、と、ただ単に常識のウソを糾弾することに著者の目的があるのではない。たしかにその見方は誤っているが、そんなことくら

いは少し丁寧に「万葉集」を読んでみればわかることなのであって、なのになぜこれほど人々の間に強固に信じられるに至ったのか、それこそが問題だ、と著者はいう。そして、その「万葉国民歌集観」が、日本を近代国民国家として確立しようとする国家的要請に基づき明治中後期に「発明」され、大正・昭和以後民間人の手によって教育の分野に普及していくさまを、豊富な例証をもとに明らかにする。

だから「万葉集」は大した作品ではない、というのではない。不朽の傑作であるとするこれまでの「色眼鏡」を外し、正しく「万葉集」の歌々と向き合いたい、という意志がここにはある。

古典をどう読むべきかも問う、大いなる挑発の書である。

(渡部泰明)